炎の天使

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
炎の天使

【Ｎコード】
Ｎ３２２１Ｒ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
今まさに異端として処刑されようとしている少女。しかしその時に何が起こったのか。この作品の主人公の生存説は本当にあります。

第一章

フランス軍の中でだ。無念に満ちた声が響いていた。
「何故だ」
「何故あの方が処刑される」
「魔女だと？」
「そんな筈がない」
こう言ってだ。誰もがそれを否定する。
「あの方はフランスを救われた」
「オルレアンはあの方なくして解放されなかった」
「それまで我々はずっと負けていたのだぞ」
「しかしそれが一変した」
「あの方のお陰だ」
こうだ。口々に言うのであった。
「どうしてそれで魔女なのだ」
「異端だと？そんな筈がない」
「異端とはカタリ派ではないのか」
「あの方は違うぞ」
そしてだ。黒、いや青を思わせる見事な髭を蓄えた長身の逞しい男もだ、兵士達の話を聞きだ。その彼等にこう言うのであった。
「御前達もそう思うな」
「あっ、将軍」
「失礼しました」
「いや、いい」
噂話は軍隊にとっては忌むべきものだ。しかし彼はそれをいいとしたのであった。そのうえで彼もまたこう言うのであった。
「私も同じだ」
「将軍もですか」

「そう思われていますか」
「あの方が異端だと」
そのことにだ。忌々しげに語る。端整な、それこそ女性ならば誰もが魅了されずにはいられない顔に怒りを篭らせて語るのだった。
「そんな筈がない」
「全くです」
「イングランドの謀略だ」
彼は吐き捨てるようにして言った。
「それが何故ああして」
「あの方を貶め」
「そのうえで」
「救い出せないのか」
彼は真剣にこのことを考えていた。
「どうにかして」
「そうですね。イングランドまで向かい」
「そのうえで」
「できる筈もないな」
それは彼もわかっていた。
「我々はパリすら解放していないのだからな」
「その状況ではですね」
「とても」
「私は断言する」
彼は言うのだった。
「このジル＝ド＝レイの名にかけてだ」
「あの方は異端ではないとですね」
「ましてや魔女などとは」
「あの方は聖女だ」
それだというのである。
「神に誓って言える」
「神にですね」

「まさしく」
「そうだ。あの方は紛れもなく聖女だ」
レイの言葉は続く。彼はそう確信していた。だからこそだ。
「それがどうしてだ」
「ジャンヌ様はどうなるのでしょうか」
「それで」
「忌々しい話だが」
こう前置きしてからだ。レイは離した。
「やはりな。最早」
「火刑ですか」
「そうなるのですか」
「異端、魔女ともなればだ」
どうなるかは欧州では常識だった。火刑しかなかった。
「そうなってしまう」
「左様ですか」
「だからこそですね」
「あの方は火刑に処せられる」
「そうなりますか」
「イングランドの奴等のせいでだ」
レイはまた言った。

第二章

「そして。王もだ」
「あの方をですか」
「最早」
「それが正義なのか」
王への批判は本来ならば絶対に許されない。しかしそれでも彼はあえて言うのであった。言わずにはいられなかったのである。
「フランスを救われたあの方を。そうして」
「助け出せたらいいのですが」
「我等の手で」
「そう思う。本当にな」
レイは実際にだ。本気でジャンヌを救い出そうと考えていた。しかしそれが不可能なこともだ。彼は実によくわかっていたのである。
それでだ。忌々しげな顔をそのままにしてまた言った。
「私に翼があればな」
「あの方の下に向かい」
「そうしてですね」
「神は何を御考えなのか」
レイはこのこともわからなくなってきていた。
「聖女を見捨てられるのか」
こう言うのであった。そしてだ。
彼はやがて軍を退き途方もない贅沢にその身を浸していく。そうして錬金術に手を出しそこから美少年達への殺戮に身を委ねることになる。青髭と言われたジル＝ド＝レイ、彼もまた何かに失望したのだろうか。
イングランドではだ。貴族や僧侶達があれこれと話していた。
「それではだな」
「ああ、いよいよだ」

「明日処刑を行おう」
「王もそう仰った」
王の存在もその話に出た。
「あの娘を火刑台にあげる」
「そうして処刑する」
「魔女としてな」
「バチカンも承認しました」
僧侶の一人が言った。
「それでよいと」
「では何の憂いもない」
「このまま処刑しよう」
「明日な」
「聖女ではなく魔女として」
「死んでもらおう」
彼等としてはだ。オルレアンの聖女なぞあってはならない存在だった。だからこそだ。異端、それも魔女として彼女を処刑することにしたのだ。
フランス王はそれについて何も言わなかった。ジャンヌを完全に手駒として考えていた。そのうえで彼女を捨てた。それだけだった。
そのジャンヌはだ。牢獄の中にいた。その中で手枷をかけられだ。囚人の服を着て置かれていた。栗色の髪を切り揃えている。髪と同じ色の目の光は強い。凛とした顔立ちをしている。そんな少女だった。
そこに僧侶の一人が来た。若い僧侶だった。彼はジャンヌに対して問うた。
「宜しいか」
「何でしょうか」
「明日に決まりました」
「そうですか」
「貴女は明日火刑台にあげられます」

まずはこのことを告げるのだった。
「そしてです」
「そうですか。わかっていましたが」
「よいのですか？」
ふとした感じでだ。僧侶はこう彼女に言った。
「貴方はそれで」
「処刑されてもですか」
「はい、貴女は魔女になるのです」
既にだ。異端審問の場でそう告げられていた。聖女ではなくそれだとだ。
「そうして火刑台にあげられるのですが」
「確かに無念です」
ジャンヌは項垂れていたが言葉ははっきりとしていた。
「ですが」
「ですが？」
「それもまた運命なのでしょう」
こう言うのであった。

第三章

「神のお導きです」
「神のですか」
「私は神のお言葉に従い村を出ました」
そうして王にその秘密を告げ彼の信頼を得てだ。軍を率いフランスの為に戦った。フランスにとってはまさに救世主であるのだ。
「そうして今はこうして」
「それもまた、ですか」
「私はそう考えます」
「私は違います」
僧侶はだ。ジャンヌの言葉を否定してきた。そのうえで彼はこう言うのであった。
「私はイングランドともフランスとも縁がありません」
「そうなのですか」
「神聖ローマに生まれました」
フランスの東にある大国だ。欧州随一の国でもある。
「ですから。その分だけ離れて見られますが」
「それでどうだというのでしょうか」
「貴女は間違っても異端ではありません」
彼は断言した。そうであるとだ。
「魔女でもありません」
「そう仰ってくれるのですね」
「はい、イングランドは間違っています」
こう彼女に話した。
「貴女を見捨てたフランス王もです」
「そうだというのですね」
「そうです。貴女は紛れもなく聖女です」
彼はまた断言した。

「その貴女が。何故」
「ですからこれもまた神のお考えによってです」
「神ですか」
僧侶の言葉がだ。悲しいものになった。
「貴女はその神によって魔女にされるのですよ」
「そう。今は告げられました」
「今はですか」
「ですが。貴女もわかっておられますね」
僧侶に顔を向けてだ。ジャンヌは話すのだった。
「私は魔女ではないと」
「はい、それは」
「そうです。私は魔女ではありません」
彼女が今言うのはこのことだった。
「決して。ですから」
「いいのですか」
「神もそれは御承知です。ですから」
「そうですか。それでは」
「明日。私は召されます」
微笑んでだ。僧侶に話した。
「神の下に」
「その神が貴女を異端にしてもですね」
「先程申し上げた通りです」
そうだというのだった。
「ですから」
「左様ですか」
「はい、それでは」
これで話を終わらせてだった。そうしてだ。
その日が来た。時の流れは無慈悲だ。ジャンヌは火刑台に引き立てられていく。そしてそこにくくりつけられてであった。そうして。
火が点けられる。炎が忽ちのうちに彼女を覆っていく。

多くの者がその有様を見ていた。殆どがイングランドの者だ。
彼等はだ。ジャンヌが焼かれようとしているのを見て安堵したような顔で言うのであった。
「これでいいな」
「ああ、これでフランスの勢いを削げる」
「オルレアンの魔女さえいなければ」
「この戦いは我等のものだ」
「勢いを取り返せる」
彼等はこう考えていた。しかしだ。
あの神聖ローマ帝国の僧侶もいた。彼はこう言うのであった。
「違う」
「違うだと」
「そう仰るのか」
「そうだ、フランスの勢いはもう止まらない」
他の国の者だからこそ言える言葉だった。
「貴殿達はこのままではだ。フランスにだ」
「勝てないというのか」
「そう言うのか」
「まさか」
「そのまさかだ。彼女を殺したところでだ」
彼もまた火刑台を見ていた。それはもう炎の柱となっている。

第四章

「貴殿等は勝てはしない。最早な」
「そうなるというのか」
「我等は」
「勝てないと」
「彼女はそれだけのものを残した」
　そのフランスにだというのである。
「そして」
「そして？」
「そしてというと何だ」
「彼女は魔女ではない」
　今度は教会への批判だった。
「それもまた。はっきりしていることだ」
「馬鹿な、それではだ」
「今あの娘は焼かれている」
　今度はだ。教会の僧侶達が言うのであった。イングランド、教会、様々な思惑から動いている彼等はだ。彼女を何としても魔女にしなければならないのだ。
　その彼等がだ。火刑台を指差して言うのであった。紅蓮の炎から漆黒の煙が沸き起こっているその燃え盛る火刑台をである。
「魔女は炎に焼かれる」
「それは当然のことだ」
「若し魔女でないのならだ」
　彼等のうちの一人が言った。
「あの娘は今だ」
「そうだ、今だ」
「今ここでだ」
　一人の言葉にだ。他の者も続く。

「あの炎から娘は助け出される」
「天使によってな」
「そうなる筈だ」
「ではそうなる」
若い僧侶は断言した。
「見るのだ、それを」
「何っ！？」
「見よというのか」
「それを」
「そうだ。見るのだ」
彼がまた言うとだった。その時だった。
火刑台にだ。何かが舞い降りたのだった。それは。
白い衣に白い翼を持ち黄金色の髪を持つ姿だった。男か女かはわからない。
その者がだ。火刑台のところに舞い降りたのであった。
「まさかあれは」
「その」
「そんな筈がない！」
「そうだ、有り得ない！」
そこにいた誰もが、若い僧侶以外の者が必死に否定する。
「何故だ、何故舞い降りる」
「あの娘は異端だ」
「魔女だ」
「それなのにどうしてだ」
「舞い降りるというのだ」
「当然のことだ」
ここでまた言う若い僧侶だった。強くはっきりとした顔で言うのだった。
「これはだ」
「当然だと」

「そう言うのか」
「そうだ、あの方は魔女ではない」
彼が今言うのはこのことだった。

第五章

「だからだ。こうして天使が舞い降りられたのだ」
「まことだったというのか」
「あの娘は聖女だったのか」
「信じられん」
「そんな・・・・・・」
しかしだった。彼等が驚いているその間にだ。
炎は消えだ。ジャンヌが救い出されていた。何とその身体は全く焼かれてはいない。
天使はそのジャンヌにだ。こう声をかけるのだった。彼女の背についてだ。後ろからその顔を見下ろしつつ覗き込んで語りかけていく。
「ジャンヌよ」
清らかな、そしてとても優しい声であった。彼女を包み込む様な。
「貴女はここで死ぬべきではありません」
「そうだというのですか」
「はい。貴女のフランスに対する役目は終わりました」
「それはですか」
「そうです。そして」
天使はだ。ジャンヌにさらに話していく。
「貴女はこれからは神の御為にです」
「神の御為に」
「働くのです。いいですね」
「はい」
ジャンヌが断る筈もなかった。天使の言葉にこくりと頷く。
「では。私は」
「共に参りましょう」
天使はまた彼女に告げた。

「いいですね、それでは」
「はい、それでは」
「新しい。貴女の為に」
最後にこう言ってだ。天使はジャンヌをその両手で包み込むとだ。姿を消した。後に残ったのはその焼くべき相手のいなくなった火刑台と取り残された者達だけであった。
取り残された者達はだ。呆然としながら言い合うばかりだった。
「馬鹿な、こんな」
「何故だ、何故こんなことが起きる」
「あの娘はまさか本当に」
「聖女だったというのか」
「聖女でなければだ」
呆然となる彼等にだ。若い僧侶が言う。
「あれだけのことができるものか」
「フランスを救った」
「そのことがか」
「そうだというのか」
「そうだ、しかもフランス王の秘密を御存知だった」
しかも王を多くの貴族達の中から見つけ出してである。多くの奇蹟がそこにあったのだ。
「それでどうして聖女でないのだ」
「くっ、では我々は」
「その聖女を焼こうとしていたというのか」
「そうだ、貴方達は罪人だ」
僧侶は彼等に冷たく告げた。
「それは永遠に語り継がれることになる」
そしてだった。ジャンヌについても語るのだった。
「あの方は。これからも生きられるのだ」
「聖女としてか」
「そうだというのか」

「そうだ。しかもだ」
彼はだ。さらに話すのだった。
「あの方は死しても尚永遠にだ」
「聖女として生きるか」
「そうなるのか」
そのことをだ。誰もが思い知るのだった。
この話は外には出なかった。誰もがなかったこととして口をつぐんだのだ。それは若い僧侶も同じだった。彼も話すことはなかった。
だがこの火刑から数年後ジャンヌの弟達の前にその聖女が再び現れたという話が残っている。これが真実かどうかは不明である。
ただ現実に言えることはある。ジャンヌ＝ダルクは今は聖人、聖女として知られている。祖国フランスを救った少女はだ。そのフランスから深く敬愛されているのである。

炎の天使　　完

２０１０・１２・３１

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3221r/

炎の天使

2011年3月2日22時40分発行